

夏目漱石  
名は金之助。  
文學博士。大  
正五年歿。年  
五十。

二 二百十日

夏目漱石

「あの音は壯烈だな。」  
「足の下が、もう揺れて居る様だ。おい、一寸地面へ耳

をつけて聽いて見給へ。

「どんなだい。」

「非常な音だ。慥かに足の下が唸つてる。」

「其の割に烟が來ないな。」

「風の所爲だ。北風だから、右へ吹きつけるんだ。」

「樹が多いから、方角が分らない。もう少し登つたら見當がつくだらう。」

しばらくは雜木林の間を行く。道幅は三尺に足らぬ。いくら仲が善くても、並んで歩く譯には行かぬ。圭さんは大きな足を悠々と振つて、先へ行く。碌さんは

小さな體軀をすぼめて、小股に後から跟いて行く。跟いて行きながら、圭さんの足跡の大きいのに感心して居る。感心しながら歩いて行くと、段々後れて仕舞ふ。

路は左右に曲折して爪先上りだから、三十分と立たぬうちに、圭さんの影を見失つた。樹と樹の間をすかして見ても、何も見えぬ。山を下りる人は一人もない。上るものにも全く出會はない。只所々に馬の足跡がある。たまたまに草鞋の切れが茨にかゝつてゐる。其の外に、人の氣色は更に無い。饅餚腹の碌さんは少々心

細くなつた。

昨日の澄切つた空に引換へて、今朝宿を立つ時からの霧模様には少し懸念もあつたが、晴れさへすればと、好い加減な事を頼みにして、とう／＼阿蘇の社までは漕附けた。白木の宮に禰宜の鳴らす拍手が、森閑と立つ杉の梢に響いた時、見上げる空から、ぼつりと何やら額に落ちた。今朝がた、饅頭を煮る湯氣が障子の破れから吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過ぎは雨かなとも思はれた。

雑木林を小半里程來たら、怪しい空がとう／＼持

阿蘇の社  
官幣大社。熊  
本縣阿蘇郡宮  
地村に在り  
て、神武天皇  
の御孫健甕龍  
命を祀る。

切れなくなつたと見えて、梢に滴る雨の音が、さあと北の方へ走る。後から、すぐ新しい音が耳を掠めて、翻る木の葉と共に、又北の方へ走る。碌さんは首を縮めて、ちえつ。と舌打をした。

一時間程で林は盡きる。盡きると云はうよりは、一度に消えると云ふ方が適當であらう。振返る後は知らず、貫いて來た一筋道の外は、東も西も茫々たる青草が波を打つて、幾段となく連なる後から、むく／＼と黒い烟が持上つて來る。噴火口こそ見えないが、烟の出るのはつい鼻の先である。

林が盡きて、青い原を半町と行かぬ所に、大入道の  
圭さんが空を仰いで立つてゐる。蝙蝠傘は疊んだ儘、  
帽子さへ被らずに、毬栗頭をぬつくと草から上へ突  
出して、地形を見廻してゐる様子だ。

「おうい。少し待つて呉れ。」

「おうい。暴れて來たぞ。暴れて來たぞう。しつかりし  
るう。」

「しつかりするから、少し待つてくれえ。」と、碌さんは  
一所懸命に草の中を這上る。漸く追ひつく碌さんを  
待受けて、

「おい、何を愚圖々々してゐるんだ。」と、圭さんが遣つ  
つける。

「だから饅餡ぢや駄目だと云つたんだ。あゝ、苦しい。  
おい、君の顔はどうしたんだ。眞黒だ。」

「さうか。君のも眞黒だ。」

圭さんは、無雑作に白地の浴衣の片袖で、頭から顔  
を撫廻す。碌さんは腰からハンケチを出す。

「なる程、拭くと、着物がどす黒くなる。」

「僕のハンケチもこんなだ。」

「ひどいものだな。」と、圭さんは雨の中に坊主頭を曝

よな  
火山灰。熊本  
地方の方言。

しながら、空模様を見廻す。

「よなだ。よなが雨に溶けて降ってくるんだ。そら、其の薄の上を見給へ。」と碌さんが指をさす。長い薄の葉は一面に灰を浴びて、濡れながら靡く。

「成程。」

「困つたな、こりや。」

「なめに大丈夫だ。ついそこだもの。あの烟の出る所を目當にして行けば、譯は無い。」

「譯は無ささうだが、是ぢや路が分らないぜ。」

「だから、さつきから待つて居たのさ。こゝを左へ行

くか、右へ行くかと云ふ、丁度股の所なんだ。」

「成程、兩方とも路になつてゐるね。併し烟の見當から云ふと、左へ曲る方が好ささうだ。」

「君はさう思ふか。僕は右へ行く積りだ。」

「どうして。」

「どうしてつて、右の方には馬の足跡があるが、左の方には少しもない。」

「さうかい。」と、碌さんは、身體を前に曲げながら、蔽ひかゝる草を押分けて、五六歩、左の方へ進んだが、すぐに取りつて返して、

「駄目な様だ、足跡は一つも見當らない。」と云つた。  
「無いだらう。」

「そつちには有るかい。」

「うん、たつた二つ有る。」

「二つきりかい。」

「さうさ、たつた二つだ。そら其處と此處に。」と圭さんは縞子張の蝙蝠傘の先で、かぶさる薄の下に、幽かに残る馬の足跡を見せる。

「是だけかい。心細いな。」

「なに大丈夫だ。天佑ぢやないか。」

「君の天佑はあてにならない事夥しいよ。」

「なに是が天佑さ。」と圭さんが云ひ了らぬうちに、雨を捲いて颯とおろす一陣の風が、碌さんの麥藁帽を遠慮なく吹込めて、五六間先まで飛ばして行く。眼に餘る青草は、風を受けて一度に、向へ靡いて、見るうちに色が變ると思ふと、又靡き返して故の態に戻る。

「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれを見給へ。」と、圭さんが幾重となく起伏する青い草の海を指す。

「痛快でもないぜ。帽子が飛んぢまつた。」

「帽子が飛んだ。い、ぢやないか、帽子が飛んだつて取つて来るさ。取つて来てやらうか。」

圭さんはいきなり、自分の帽子の上に蝙蝠傘を重しに置いて、颯と薄の中へ飛込んだ。

「おい此の見當か。」

「もう少し左だ。」

圭さんの身體は次第に青い物の中に、深くはまつて行く。仕舞には首だけになつた。あとに残つた碌さんは又心配になる。

「おうい、大丈夫か。」

「何だあ。」と向の首から聲が出る。

「大丈夫かよう。」

やがて圭さんの首が見えなくなつた。

「おうい。」

鼻の先から出る黒烟は、鼠色の圓柱の各部が絶間なく蠕動を起しつゝある如く、むくくと捲上つて、半空から大氣の裡に溶込んで、碌さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。碌さんは悄然として首の消えた方角を見詰めて居る。

暫くすると、丸で見當の違つた半町程先に、圭さん

の首が忽然と現れた。

「帽子はないぞう。」

「帽子は入らないよう。早く歸つてこようい。」

圭さんは坊主頭を振立てながら、薄の中を泳いで来る。

「おい、何處へ飛ばしたんだい。」

「何處だか相談が纏らないうちに飛ばしちまつたんだ。帽子はいゝが、歩くのは厭になつたよ。」

「もういやになつたのか。まだ歩かないぢやないか。あの烟と、この雨を見ると、何だか物凄くつて、歩く

元氣がなくなるね。」

「今から駄々を捏ねちや仕方がない。——壯快ぢやないか。あのむくくく烟の出てくる所は。」

「あのむくくくが氣味が悪いんだ。」

「冗談云つちやいけな。あの烟の側へ行くんだよ。さうして、あの中を覗き込むんだよ。」

「考へると全く餘計な事だね。」

「兎も角も歩かう。」

暫くして圭さんは立止つて、黒い烟の方を見る。

濛々と天地を鎖す秋雨を突抜いて、百里の底から





沸騰る濃いものが渦を捲き渦を捲いて、幾百噸の量とも知れず立揚る。其の幾百噸の烟の一分子が、悉く震動して爆發するかと思はれる程の音が、遠いく奥の方から濃いものと共に頭の上へ躍り上つて来る。

雨と風のなかに、毛蟲のやうな眉を擡めて、餘念もなく眺めて居た圭さんが、非常な落附いた調子で、

「雄大だらう君」と云つた。

「全く雄大だ」と碌さんも眞面目で答へた。

圭さんはのろそりと踵を廻らした。碌さんは默然として跟いて行く。空にあるものは、烟と雨と風と雲である。地にあるものは、青い薄と女郎花と處々にわびしく交る桔梗のみである。二人は乾々として無人の境を行く。(二百十日)

芥川龍之介  
文學者。東京  
帝國大學文科  
大學出身。